BOOK IX — 自由の代償

第05章 — 次世代

01 — 二人の間の距離

デレン大尉の前で自動ドアが開いた。冷たい風が吹き込み、病院の夜間診療を案内するポスターの端がめくれた。

ロイはその場を動かなかった。灰色のコートの男はデレンに続いて中に入った。両手は見えるところにあり、コートの前は開いたままだった。ロイが知っている徽章は一つも身につけていない。首の付け根には、手術の痕とも思える細い傷があった。

デレンはロイの数歩手前で立ち止まった。

「追加の指示を受けた。我々と来てもらう」

「先ほど答えたはずだ」

「命令の性質が変わった」

レイチェルが前に出た。端末には、緊急審理を受理したという評議会からの通知が表示されていた。デレンは文書に目を通したが、差し出された端末を受け取ろうとはしなかった。

「審理のことは承知している。作戦を続行するよう指示を受けている」

反対側の扉から看護師が手押し台車を押して現れた。サトウ軍曹は兵士の一人に道を空けるよう求めた。台車は双方の間を通り過ぎ、車輪がタイルの上で小さな不規則な音を立てた。

ロイは看護師が通り過ぎるのを待った。

「ここではやめろ」

デレンは診療棟に目を向けた。彼に与えられたのは対象者の身柄を確保する任務であり、病院に対する権限ではない。ロイに一緒に外へ出てもらえないかと尋ねた。

ロイは玄関ホールを出ることには同意した。車両に乗ることには同意しなかった。

廊下の端に、法務代理人を伴ったイマニが現れた。ロイが固定具を外していることに気づき、彼に向かって歩き始めたが、レイチェルが途中で呼び止め、事情を説明した。イマニはレイチェルの向こうにいる灰色のコートの男を見た。

「彼を連れていけば、治療が中断されます」

見知らぬ男が顔を向けた。

「身体を動かすことは禁忌なのですか？」

イマニは男を見つめた。軍の人間から具体的な医学的状態について質問されたのは、これが初めてだった。

「激しい動きは、です」

男はわずかに頭を傾け、その答えを受け止めた。

ロイは、患者を移動させることと、その身柄を確保することの違いを男が理解しているのだろうかと思った。そして、それが次に起きることを変えるのだろうかとも思った。

外では空が暗くなっていた。中庭の端にはすでに雨水がたまり始めていた。

02 — 別種の兵士

中庭は救急車のために造られたものだった。屋根付きの通路が病院と古い管理棟を結んでおり、その先には空の荷役スペースの脇に配送車が停まっていた。

ロイは屋根の下を歩いた。レイチェルも後に続いたが、サトウが扉の近くにとどまるよう求めた。ロイはすぐに振り返った。

「彼女も一緒だ」

デレンは首を振った。「彼女に関する命令は出ていない」

「なら、止める理由はない」

一瞬、サトウは判断に迷ったようだった。大尉は彼女に、レイチェルを通すよう指示した。灰色のコートの男はすでにロイと輸送車両の間に立っていた。ロイは、男がそこまで移動するところを見ていなかった。

「何と呼ばれている？」ロイが尋ねた。

男は軍の識別番号を答えた。M-04。

「それは番号だ」

「私を識別するものです」

「どう識別されているかを聞いたんじゃない」

男は苛立ちを見せることもなく、ロイを見た。特に若くも老いてもいない顔だった。前歯の一本の表面に、ごく小さな凹凸があった。別の場所で出会っていれば、バスを待っている男にしか見えなかったかもしれない。

「作戦を遅らせています」男は言った。

ロイは、自分もかつて同じように答えたかもしれない時代を思い出した。その記憶は、見知らぬ男の速さよりも不穏なものだった。

ロイは最後にもう一度、別棟から自由に出られるのかとデレンに尋ねた。デレンは、拘束の条件を変更する権限は自分にはないと答えた。

レイチェルがロイに近づいた。「あなたが拒否したことは記録に残したわ」

雨が強くなった。病院の中で電話が鳴り、誰かが応答した。ガラスの向こう側では、建物の日常が続いていた。

デレンはM-04にロイを輸送車両まで連行するよう命じた。

M-04はロイの負傷していない腕に向かって手を伸ばした。

ロイは一歩後退した。

男の手もそれに合わせて動いた。威嚇するような仕草も、表情の変化もなく、ロイが命令の意味を考え直すだけの間もなかった。

手がある方向から伸びてくるとロイは予測していた。だが、そうはならなかった。

接触を認識したときには、すでに左手首をつかまれていた。

03 — 反応する前に

ロイは手を引こうとした。手首にかかる圧力が、それを阻むのに必要なだけ強くなった。重心を移して身体をひねる。相手の肩もそれにつられて動くはずだった。だが男は直立したままで、ロイの重心だけが容易には立て直せないところまで移動していた。

右肩の下の傷が激しく痛んだ。

「彼を放して」レイチェルが言った。

デレンは連行の中止を命じた。M-04は即座にロイを放した。

ロイは後退し、左手でコンクリートの柱の端をつかんだ。殴られたわけではなかった。今起きたことを示すものはほとんど残らないだろう。肩の痛みと、自分の身体が予想どおりに動かなかったという突然の自覚を除いては。

彼は相手を見た。M-04が力を使ったと思わせるものは何もなかった。

ロイはもっと速い敵と戦ったことがあった。人間の観察者が危険を認識するより先に動ける機械を相手にしたこともある。距離と力の関係についての理解を揺るがす動きを見せたハヴェルとも戦った。

だがこれは違っていた。M-04の動きはロイにも理解できた。自分と同じ形の身体が生み出す動きだった。変わっていたのは、認識してから反応するまでにロイに与えられる時間だった。

「命令されているのは、それだけか？」ロイが尋ねた。

M-04はデレンが答えるのを待った。

大尉は、これ以上抵抗すれば負傷する恐れがあるとロイに告げた。出発前に軍の医療スタッフに診察させることも提案した。

「私にはもう医師がいる」

デレンの表情が硬くなったが、声は静かなままだった。「この件を解決せずに帰ることはできない」

ロイは玄関付近に立つ兵士たちのことを考えた。彼らは対峙に加わってはいなかったが、その見守り方をロイは最初の生から覚えていた。自分たちが実行すべき決定を、誰かが下すのを待っているのだ。

M-04が再び近づいてきた。

今度はロイが先に動いた。負傷していない手を男の胸に当て、前へと押し込んだ。イマニがどの運動でも許さなかったほど、全身を使った。

一瞬、男が押された。

ロイは距離を取るのに十分な空間を作ったと思った。

次の瞬間、両足が地面を離れた。背後の低い壁に叩きつけられ、歯にまで衝撃が伝わった。M-04は少し離れた場所に、片手を上げたまま立っていた。

その手が動くのを見た記憶が、ロイにはなかった。

04 — 差の大きさ

レイチェルはロイに駆け寄った。彼は壁にもたれ、うつむいたまま座っていた。彼女が首に触れると、ロイは目を開いた。

「息はできる？」

彼はうなずき、浅く息を吸った。痛みが走ったが、肩の傷と同じ場所から生じているものではないようだった。

M-04はデレンに向き直った。

「対象者には意識があります。作戦の続行は可能です」

サトウは男を見ていた。再現された街路で彼の動きを見たことがあった。落下する枠組みは、男が生きている世界よりも遅い世界に属しているかのようだった。だが病院の中庭は再現された街路ではない。ロイの袖の下端には血がにじみ、その傍らに膝をつく女性も訓練の一部ではなかった。

デレンはM-04にその場を維持するよう命じ、医療支援を要請した。

病院の中では、エイドリアン・タイレルが職員から騒ぎを聞いていた。イマニとともに玄関へ到着すると、二人の看護助手が機材を持って出てきたところだった。

イマニはレイチェルの隣に膝をついた。ロイの負傷した肩を調べ、指を動かすよう求め、それからじっとしているよう言った。彼は彼女が話している間に立ち上がろうとした。

「お願いしたわけではありません」イマニは言った。

彼は再び腰を下ろした。

エイドリアンはM-04を見た。男の胸は、安静にしている人間と変わらない間隔で上下していた。観察するだけで実際の身体出力を割り出すことはできない。だがエイドリアンは、男の能力のほんの一部しか目にしていないのではないかと考えた。

研究班が取り組んできたのは、繰り返し負荷を受ける人工組織の健全性をどのように維持するかという問題だった。身体能力の向上それ自体を長寿への前進と見なす者は、班の中に一人もいなかった。

しかし軍のどこかで、別の機関が、エイドリアンがようやく問題として定式化し始めたばかりのものを、すでに解決しているらしかった。

そのために何を犠牲にしたのか、彼には分からなかった。

ロイが彼を見た。

「製造する者すべてに、あれができるのか？」

「分からない」

「本気を出していなかった」

エイドリアンはロイの視線を追った。M-04は大尉から目を離していなかった。

「それは覚えておくべきことだ」エイドリアンは言った。

再現すべき能力だとは、ロイに言わなかった。

05 — 待機命令

イマニがまだロイを診察しているとき、救急車が中庭に入ってきた。運転手は軍の車両が通常の進入路をふさいでいるのを見て、クラクションを鳴らした。

サトウが運転手のもとへ向かった。別の兵士がデレンを見て指示を待った。大尉は輸送車両の移動を許可し、連絡将校に玄関をふさがないよう指示した。

連絡将校は、確保用の車両は作戦計画に従って配置されたものだと反論した。

「病院は今も診療を続けている」デレンは答えた。

救急車には呼吸困難を起こした女性が乗っていた。運転手と看護師は彼女を運び、ロイに目を向けることもなく一行の脇を通った。イマニは応急処置の包帯を固定し終えると、新たな患者のもとへ向かった。別の医師の手が空き次第戻ると約束した。

レイチェルはロイが立ち上がるのを助けた。歩くことはできたが、痛みのため、一歩ごとに足取りが不確かになった。

M-04が二人に向かって動いた。

「対象者が指定区域から離れようとしています」

「治療を受けに行くのよ」レイチェルが言った。

デレンは手を上げた。「その場にとどまれ」

男は止まった。救急車にも、病院にも、屋根の下に出てくる人々にも注意を向けなかった。彼は待った。

一瞬、ロイは男に腹を立てた。命令されなくても、何かを自分で決めてほしかった。立ち去ることを阻まれている人々を見て、彼らを拘束する正当な理由などないと気づいてほしかった。

だがロイには、M-04が何を教えられてきたのか、命令に背けばどうなるのか、あるいは自分に選択肢があると思っているのか、分からなかった。

自分が手に入れた自由を一度も持ったことのない者を裁くのが、いかに容易かをロイは知っていた。

彼は男に声をかけた。

「連中がなぜ私を欲しがるのか、知っているか？」

M-04は彼を見ずに答えた。

「私の指示は、あなたの身柄の確保に関するものです」

「それは連中がお前に何をさせたいかだ。なぜさせたいかじゃない」

返事はなかった。

数メートル離れたところで、連絡将校が国防事務局に電話をかけていた。ロイは自分の名前に続いて、医療上の延期という言葉を聞いた。

レイチェルが彼の手を取った。

「今日、すべてを知る必要はないわ」

ロイは彼女に導かれるまま、病院へ向かった。

06 — 有用性の低い記録

ヴェン将軍は最初の報告を文民局長から受け取った。局長は連絡将校を通じてそれを入手していた。報告書には、ロイが実力で抵抗し、機密指定要員はさらなる支援なしに身柄確保を完遂できると記されていた。

三分後、デレン大尉から二つ目の報告が届いた。連行の試みの際に生じた負傷と、医療上の理由による一時中断について記されていた。また、病院を利用する患者に対して軍が負う責任について、明確な指示を求めていた。

ヴェンは二つの文書を並べた。

「どちらかが、彼の身体能力の試験を許可したのか？」

局長は首を振った。

「では、なぜ君の報告書にはその評価が記載されている？」

局長は、直接対峙したことで、それまで観察によってしか得られなかった情報を入手できたと説明した。

「有用な情報です」と、彼は付け加えた。

ヴェンは元の映像記録を求めた。届いた映像に音声はなかった。ロイが男から離れようとする様子、最初の拘束の試み、そして二度目の接触を見た。映像が終わるまでに、何人もの人々が画面を横切った。

局長はロイが接近してから倒れるまでの時間を示した。

「我々の推定は控えめでした」

ヴェンは映像を最初から再生した。政府が危険と見なしている男の身柄確保を、彼女は承認した。映像に映っていたのは、すでに身体に障害を抱えた男が、正当ではないと考える命令に抵抗しようとする姿だった。

政府の評価が否定されたわけではない。だが、説明資料の前提のいくつかが、それほど確かなものではないように思えた。

「残り二人の機密指定要員はどこにいる？」

「合同部隊と行動しています。まだ出動の必要はありません」

彼女は局長を退出させ、デレンに直接電話をかけた。

大尉は、ロイが医師の監督下で院内に戻ったと説明した。病院は、適用可能な令状なしに診療室に入ることを拒否していた。部隊は現在の位置を維持していた。

ヴェンは医師の評価が出るまでの一時中断を承認した。デレンには元の報告書を保存し、事務局内で回覧されている版に置き換えないよう指示した。

通話を終えると、彼女は映像記録に戻った。

局長は、推定が控えめだったと言った。命令を出している人々に対して、同等の評価を行ったことがあるのだろうか、と彼女は思った。

07 — 測ることのできなかったもの

診察が終わる頃には、緊急審理が始まっていた。レイチェルは法務代理人から、評議会が暫定的な裁定を検討していると伝えるメッセージを受け取った。軍は評議会の権限に対する異議を撤回していなかった。

ロイは診察台に横たわっていた。イマニは新たな骨折の兆候を見つけられなかったが、以前からの傷の周囲の組織にはさらなる負荷がかかっていた。朝に話し合った回復の見通しは、もはや信頼できるものではないと告げた。

彼は自分の出力が落ちたのかと尋ねた。

「測定していません。今日の午後に測るつもりもありません」

エイドリアンが携帯端末を持ってやってきた。病院の玄関のカメラが撮影した短い映像を確認したという。撮影速度が低すぎて、正確な反応時間は割り出せなかった。男の組織の種類や神経構造を示す信頼できる証拠も得られなかった。

それでもロイは映像を見せてほしいと頼んだ。

M-04の手から逃れようとする自分を見た。二度目の接触を見て、自分の動きに比べて相手の動きがいかに小さかったかを知った。

別の映像の中で、ハヴェルはロイにはほとんど理解できない動きの後、剣を下ろしていた。あの対峙以来、ロイは意識が考え終わるよりも前に動作が始まる感覚を取り戻そうとしてきた。

その経験を能力に変えたいと思っていた。

見知らぬ男は、その望みを疑う新たな理由を彼に与えた。

「同じ原理なのかもしれないな？」ロイはエイドリアンに尋ねた。

「可能性はある。彼の体内の測定値がないからね」

「ハヴェルは人間だった。あの男は違う」

エイドリアンは腰を下ろした。

「そして、それが最も重要な違いかもしれない。あれを可能にするために何が変えられたのか、私たちには分からない」

彼は、次に承認を得て行う研究では、ロイの最大出力を高めるのではなく、既存の身体構造が負荷をどう分散するかに焦点を当てることを提案した。小規模な実験になる。何の改善も得られない可能性があった。

ロイはもう一度映像を見た。

「次世代がどんな姿になるか、分かっていると思っていた」

レイチェルが彼の隣に座った。

「彼は次に来るものではないのかもしれない。彼らが次に造ることを選んだものなのかもしれないわ」

ロイは画面を消した。

08 — 去らなかった車両

日暮れに、評議会は独立した審査が行われるまで、確保命令を一時停止する裁定を下した。法務代理人はその裁定を国防事務局と、病院にいるデレン大尉に送った。

デレンは受領を認めた。事務局は、裁定に拘束力があるとは認めないと彼に通告した。ヴェン将軍が承認した医療上の中断を条件として、彼の指示は有効なままだった。

どちらも相手を動かすことはできなかった。

外では、サトウが部下の交代勤務を手配していた。軍の輸送車両内に残っていた二人の機密指定レプリカントが、初めて外に出た。一人は女性だった。もう一人は灰色のコートのポケットに左手を入れたままの男だった。

M-04は彼らと短く言葉を交わした。それから三人は屋根の下に立ち、それぞれ病院の敷地の異なる方向を見つめた。

上階の窓から、ロイは彼らを見ていた。自分が対峙した男こそ中庭で最も危険な人物だと思っていた。だが今は、三人のうち誰が最も危険なのかを判断する根拠がないことを理解していた。彼らが軍の用意できる最も優れた要員なのかどうかも分からなかった。

レイチェルが彼のそばへ来た。研究資料は依然として病院の保管下にあり、封印されていた。エイドリアンは、同意が得られ、機材も利用できる手順に研究班の作業を限定することに同意していた。翌朝の実験予定はすでに修正されていた。

「帰るつもりはないようだ」ロイは言った。

「私たちもよ。イマニが移動しても大丈夫だと言うまでは」

反論しようとしたが、彼女の答えに安堵している自分に気づいた。今のところ、部屋は暖かかった。照明も点いている。廊下では、訪ねてきた人の言葉に女性が笑っていた。

彼はこれまでの生の多くを、ほかのすべてが機能しなくなったときに自分の身体が行う仕事こそが、生き延びることなのだと考えて過ごしてきた。その仕事の多くが、いつも他の人々によって担われてきたことを理解し始めた。

窓の下で、車両がエンジンをかけた。数メートル移動し、街灯の下で止まった。別の車両がそれまでの位置に入った。

ロイは三人の見知らぬ者が輸送車両に戻るのを待った。彼らは戻らなかった。

照明に照らされた中庭を背景に、窓ガラスに映る自分の姿はかすかにしか見えなかった。背後に立つレイチェルと、袖の端で色が濃くなった包帯が見えた。

彼は次世代との最初の遭遇を生き延びた。

次世代は、そのために何一つ代償を払わなかった。

第05章 終。